

教育者の心

学長 藤原了然

大学の使命が学問の蘊奥をきわめるにあることは古今にわたる通則であろう。この使命達成に向つて、私立大学においては、それぞれの建学の精神なるものを明確にすることによつて、その存在の意義を強調している。

わが佛教大学は、いうまでもなく佛教精神（つづめていえば法然上人の念佛精神）をその建学の精神とするものであるが、この建学の精神たる佛教精神が、まことの人間完成、そしてよき社会的人材の養成ということに向つてどういう役割を果たしているかということについて考えてみたい。

教育の場において忘れられてならないことは、一つには、〈玉磨かざれば光なし〉といわれているように、教育するものと教育されるものと間に学問に対する〈こころの火ばな〉が散るのだから、教育という言葉はいたずらなる画餅に帰するであろう。また他面においては、〈瓦を磨いて光りを求める〉といった愚挙があつてはならないということである。

このことについて暗示的な言葉として、かの梵網菩薩戒經の一句が想起される。

「汝是当成佛 我是已成佛 常作如是信 戒品已具足」

へ佛が弟子達に向つて次のように説かれた。お前たちは努力さえすれば、皆いずれも佛になる人た

ちばかりだ。わたしはただ已でに佛となつてゐるというだけでお前たちと本質的に異つた存在ではない。従つて、この道理をよく心得て、自からの能力に対する信念が確立すれば、それがそのまま佛になる行の具備に外ならない」

この考え方は、かの涅槃經の名句たる「一切衆生 悉有佛性」へすべての人人はその現実的な如何なる差異をも超えて、ことごとく佛になりうる」という思想に淵源するものとされているが、教育の場においてもこのことは深く考慮さるべきところであらう。学ぶ者への信頼といえようか。

しかも、その実践に當つて特色ある大乘經の一つである維摩經においてはその文殊師利問疾品において「衆生病則菩薩病 衆生病愈菩薩亦愈 又言是疾何所因起 菩薩疾者以大悲起」

これは、釈尊の高弟である文殊師利が維摩居士の病床を見舞つたときの對話とされているが、一般の人人（衆生）が煩惱の病に苦しめられるのを見ると悟つた人（菩薩）はこのことを自からの病として受けとめずにはいられない。したがつてもし衆生の病が愈ゆれば菩薩の病もまたおのずから愈える。だから菩薩の病は何処から起るかといへば、それは衆生を憐愍してやまない大悲から起つてゐるといえる

と。教育者の心情ここにきわまるというべきであらうか。

佛教精神をよりどころとする佛教大学の百年の伝統は、この梵網經所説の人間完成への可能性と、維摩經的教育愛に立脚して築き上げられて来たことを確信したい。そして、この確信が今日のそして明日の教育界において、佛教大学のゆるぎなき指針とされ、佛教大学が「為世灯明」の輝きを不動かつ永遠のものたらしめるであらうことを希念してやまないものである。